2Ha－4

生理・心理反応からみた至適浴室温に関する実験的研究

○奥水　ヒカル*，　栃原　裕*，　大野　静枝**
（*国立公衆衛生院，**日本女子大学）

目的　入浴に関して生理学的見地からの報告や提案は幾つか見られるが，入浴も含めた浴室（脱衣室）温度についての研究は少ない。また、住宅内の空調空間（居間等）と非空調空間（脱衣室、トイレ、廊下等）の温度差による人体への影響も問題とされており、住宅内の居住性を高めるという点においても至適浴室温度を検討することは意義があると考えられる。我々の研究では、浴室温度の違いによる生理反応・心理反応の影響を検討し、至適浴室温度を求めることを目的として実験を行った。

方法　浴室温度を気温15，19，23，27，31℃の５条件とし，被験者は22～24歳の健康な女性８人を採用した。湯温は41℃，入浴時間は10分間とした。着衣は入浴前と入浴中は水着のみ、入浴後はＴシャツ・短パンのみ着用し設定室に30分間滞在した。

結果　実験の結果，入浴後の平均皮膚温は31℃～34℃に分布すること，気温と申告の関係より気温23℃が最も不満の少ない温度となること等が明らかにされた。同様の方法により行った冬期実験の結果とも総合的に検討する。

謝辞：実験遂行にご協力いただいた当時の日本女子大学学生高橋温子，吉井紀子，和田眞理子の三氏に深謝の意を表します。